

ある日の土曜日

「む〜…また散らかってる…」

ちよっとした用事でやってきた理奈ねーちゃんに
部屋の中を見られてしまった。

「いやー…ここ数日ゲームにハマってる」

「じゃあ私が片付けちゃう!!
ほらほら、こんな所にペットボトル転がしてたら
転んじゃうんだから」

「あ、後でやっつくってば」

また世話焼きスイッチを入れてしまった。
そこら中に散乱してるモノを片っ端から拾っていく理奈ねーちゃん



「ん…なんかこれ…」

「あぁっ！いや、ちよ、それは…」

「理奈ねーちゃんが手に取ったのはエロ同人誌だった
固まる僕をよそに無言でページをめくりだす
理奈ねーちゃん」

「わ…ええっ…こんな事まで…?」

「も…もうそんな見なくていいって!」

「…ふーん…たあ君みたいな真面目な子も
こういうのに興味あるんだねえ」

「ちよ、ちよっと買ってみただけで…」

「子供のころからずっと知ってる仲なだけに
母親に見つかったかのように動揺してしまう」



「ま、男の子だし仕方ないよね
でもちよつと過激じゃないかなあれ」

「え、えつと…その…」

「ま、たあ君のお母さんには内緒にしといてあげる」

「理奈ねーちゃんはちよつと悪戯っぽい笑みで僕を見た」

「さ、それより掃除掃除！本格的にやっちゃおうよお」

「僕はどうしていいかわからず
彼女のペースに巻き込まれて行ってしまった」



「たあ君、いま何時？」

「えっと、3時半」

「そっか、間に合ってたよかった
5時からちよっと出かけるから」

「そうだったの？」

「じゃあ僕の部屋なんてほっとして
用意してよ。なんか悪いよ」

「平気平気。」

「ちよっと人と会うだけだし。」

「それにたあ君の散らかった部屋
放っておけないもん」

「ありがとう理奈ねーちゃん…
なんて優しいんだ。」

「そして今日は…白いのがはみ出てるよ…」

「理奈ねーちゃんのむっちりとしたお尻を包む
薄い布…一度でいいから全部見たい…」



「シャワー浴びてないのに
イイの...?♡」

「むしろそれがいいんだよ
しっとり蒸れてこそあ」

「や、やだもう...
さっきまでお掃除してて
汗かいたから...」

「すは...すは...
理奈の匂い興奮する♡
ホラもつと腰振って。」

「陽くんは変態だなあ♡
えい♡えい♡」

むちん...♡♡♡

じくくっ

しゅん

むにゅ

しゅん

しゅん

むちん...♡♡♡

しゅん

しゅん

きもちいい♡♡♡

ん♡♡

ん♡♡♡



「ほらほら頑張れよ♥
今日もセックスするために
俺んち来たんだろ♥」

「んっ♥ん♥
陽くんのちんちん、
理奈の蒸れ蒸れのおしり、
気持ちよくなってる♥」

「うっほお…♥
パンツキと尻コキ
同時に味わえて
さいじょ☆」

♡♡♡♡♡

「んっ♥ん♥

「んっ♥ん♥

「んっ♥ん♥

「んっ♥ん♥

「んっ♥ん♥

「んっ♥ん♥

「んっ♥ん♥

「んっ♥ん♥

「んっ♥ん♥

「んっ♥ん♥

んっ♥

きもちい？

私はもう、彼とのエッチが
毎日の楽しみになっていた。
エッチしてくれるなら
どんな恥ずかしい要求にも
答えられる…



おっぱい

ぶるぶる...

はっ

は、

はあ

はあ

「ふああつ
あつたかいの出てる」

「理奈のおパンツの中、
陽くんの精液で
ぬるぬるにしてえ」



恥ずかしいお尻の穴の入り口の方を浅く刺激されてぞわぞわとした快感に戸惑ってしまう私

「だめっ...♡
ほんとに...♡ああッ♡
だめええっ♡♡」

「ダメダメ言う時は感じてる時だよなあ？イケイケ♡」

「あっ♡
だめ♡
ほんと♡」

「いっ♡
ぐっ♡
ぐっ♡」

はっ♡

はあ♡

は、♡

がっ♡
がっ♡
がっ♡

はあ♡
はあ♡

「ち♡ちが...あっ♡
お♡お尻のアナ
いじられながら
イっちやうッ♡♡」

「きゅっ♡
きゅっ♡
きゅっ♡」

「いっ♡
ぐっ♡
ぐっ♡」



「おーら、お待ちかねのおチンポだぞお♡」

「はあああん♡おちんぼしゅき♡」

「うちもそのうち開発しようねー」

「んっ♡だめ♡」

「そこだめえ♡」

「恥ずかしいからあ♡」

「うちから丸見えなの知らなかった？
弄って欲しいのかなっ♡」

びっ♡ びっ♡

あッ♡

びっ♡ びっ♡

あッ♡ びっ♡ びっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡

はっ♡

んっ♡

「ち♡ちが…あっ♡
お♡お尻のアナ
いじられながら
イっちやう♡♡♡」

